

親鸞が好きな日本の知識人たち

第二次世界大戦が終わり、敗戦国となった日本は、終戦以来、経済的には未曾有の発展を遂げましたが、日本人が精神的な支柱としてきた様々な価値観は、戦前思想として一括して葬られる結果となりました。それ以後、西洋近代思想のみが思想として独歩するようになっています。もう少し具体的に言えば、あらゆる思想が、思想の相対性(どのようない思想も絶対的な存在ではなくたということ。たとえば、国家体制を批判することも可能となったりした。)という波をかぶり、何が正しく、何が誤っているのかの判断基準すらわからなくなった時代が到来することになりました。

一方、世論をリードする立場にある知識人たちは、新たな価値観を模索する事に耐えられなくなり、西洋文化を移植するという作業に自分自身を埋没させていました。

そのような時代背景の中で、精神的価値観を喪失した日本人は、海外の国々から見ると、西洋近代の経済発展至上主義を模倣し、経済的繁栄のみを追い求めるエコノミックアニマル(道徳的価値観を持たない日本人)として蔑(さげす)まれ、そのイメージも定着してしまいました。それは国内の社会現象としては、拝金主義的な風潮が蔓延し、持てる者として我が世の春を謳歌する勝ち組と中小零細企業や労働者の権利を声高に主張する勢力との二極分化と対立を生むようになりました。

このような二つの社会層が拮抗、対立する狭間で、揺れる心の置き所を見つけれない一部の知識人の心をとらえたのが親鸞なのです。では、どうして彼らは、いわゆる「親鸞好き」になってしまったので

しょうか。それは、どちらか一方の勢力に組み入ることでもできず、何が正しく何が誤っているのかという価値判断すら持つこともできない無常感の中で生きていく知識人が、親鸞特有の負の感受性(投げやりな後退感覚)に共鳴したからに他なりません。

親鸞は、『歎異抄』の中で、「念仏は地獄の業因であるか、極楽の業因であるか存じません。自分は、ただ、法然の教えに従っているだけです。もし、法然の教えに従って、念仏を唱えて地獄に墮ちてもいささかの後悔をもしません」と述べています。

なんと定見のない無責任な言葉でしょう。また、このような親鸞に傾倒する知識人は、なんと哀れな存在なのでしょう。そこには、他者に何かを語る信念も責任も見受けられません。しかし、これらの知識人がマスメディアの中で踊るだけの存在なら、響聲(ひんしゆく)を買うだけで済みますが、親鸞の場合は、そうはいきません。一宗の開祖であり、その開祖の言葉として考えるならば、これほど人を馬鹿にした話はありません。

たとえば、病気になるって医者にいったとします。すると医者は、この薬を飲めば病気が悪化して死ぬかも知れないし、治ることもあるかも知れないなどといわれたらどうでしょう。そんな医者は、医者として失格なのは当然です。

このように、親鸞を開祖とする浄土真宗は、釈尊の教えに高低、浅深があることも知らぬ、無責任で、定見のない、哀れな開祖を押し頂いた宗教なのです。

浄土真宗とはどのような宗旨か

浄土真宗は、法然が開いた浄土宗から分かれた親鸞を開祖とする宗派です。真宗とも呼ばれ、以前は

一向宗、門徒宗とも呼ばれていました。

法然は、中国浄土宗の三師、曇鸞(どんらん)、道綽(どうしゃく)、善導(ぜんどう)の教えを学び、日本に浄土宗を広めました。親鸞はその跡を継ぎ、さらに念仏の教えを深く信じることを説きました。しかし、法然と親鸞は、釈尊の説かれた一大仏教に對しては、まことに無知だったと言わざるを得ません。なぜならば、釈尊は、末法の時代(釈尊が亡くなられて後二千年後。この時代には釈尊の法は、經典のみ残り、修行も功德もなくなる時代となる)が到来することを自ら説き明かすと同時に、末法には末法の仏様が現れられることを法華經に、きちんと予証されているからです。

釈尊が説かれた經典は五千、七千といわれるほど数多くありますが、それらには順序次第があり、釈尊がこの世に現れた本懐(真の目的)は、その中でも最も優れた法華經を説くためにあったことは、法華經の開經である無量義經に「諸(もろもろ)の衆生の性欲不同(しょうよくふどう)なることを知り。性欲不同なれば種種(しゅじゆ)に法を説き。種種に法を説くこと、方便力(ほうべんりき)を以(もつ)てす。四十余年には未だ真実を顕さず」と説かれ、さらに、法華經方便品には「正直に方便を捨てて、ただ、無上道(最上の道)を説く」と法華經こそが、釈尊の説かれた唯一最高の法であることが明らかに示されています。

ところが、浄土宗や浄土真宗は、釈尊が方便として説いたのであるから正直に捨てよと言われた觀經、觀無量壽經、阿彌陀經を依經(根本の教え)として成立した教えなのです。

さらに悪いことに、法然・親鸞が師とする中国の曇鸞は、釈尊の本懐である法華經を難信難解(信じがたく解しがたい)であるから、末代無知の人々の機根にはかなわないと法華經を排斥し、ただ、浄土

浄土真宗とは、どのような宗教か

三部経のみが未代無知の人々の行い得る道であると説き、道緯は法華経は、未だ一人も得た人はいないと暴言を吐き、善導は、法華経を難行として、成仏する人は、千人修行しても一人もいないと罵(ののし)ったのです。

これを知った法然は、『選択本願念仏集』で、念仏のみが衆生を救う教えであり、そのほかの法華経を含む一大聖教は、捨閉闍抛(しゃへいかくほう)せよと説き、これらの聖教を捨てよ、閉じよ、闍(さしお)け、抛(なげう)てとの悪見、邪見を展開したのです。まさに、天を恐れぬ所行だといわざるを得ません。

法華経には、「若(も)し法を聞くこと有(あ)らん者は、一人として、成仏せずということ無けん」と法華経の功德の甚大なことが説かれています。それにもかかわらず、法然は、この法華経を捨閉闍抛せよと説いたのですから、法然の教えは、仏の教えに弓を引く邪教といわざるをえません。親鸞は、この法然の邪義をさらに進めたのですから、もつてのほかという以外にはありません。さらに法華経を見ていくと、「若(も)し人信ぜずして、此の経を毀謗(きぼう)せば、則(すなわ)ち一切、世間の仏種を断ぜん(中略)其(そ)れ斯(か)くの如(ごと)き經典を、誹謗すること有(あ)らん(中略)其(そ)の人命終(みょうじゅう)して、阿鼻獄(あびごく)に入(い)らん」とあります。法華経を信じないで、誹謗中傷を加えるならば、その人は、無間地獄に墮ちるといいます。このように、法華経は尊い經典ですから我々未代の機に合わないとする浄土宗・浄土真宗の僧俗(僧侶と信者)が、不信誹謗の失(とが)により無間地獄に墮ちることは、この御文からも明らかなのです。

実は、このことを具体的に証明した人物がいます。それは前述した念仏の開祖・善導です。善導は「自分は色々な苦しみで責められて休む暇もないから西(阿弥陀仏のいるという西方十万億土)へ帰りたいと言って、自分の寺の柳の木に登りました。そして、枝に縄をつつて西

に回って飛び降りたのですが、枝が折れて腰骨を強打し、七日七晩死ぬにも死にきれず、のたうち回って狂い死にした」と『浄土往生伝』には書かれています。

日蓮大聖人はこの事実を鑑みられ、「善導と申す愚癡(ぐち)の法師が広めはじめて自害して候ゆえに、念仏をよくよく申せば自害の心出まし候ぞ」と厳しく破折されています。このことからわかるように、法然・親鸞が説いた念仏の教えは、一生懸命やればやるほど死にたくなってしまう、地獄の業因となる邪宗教なのです。

釈尊の説かれた末法の仏様とは

前述したように、末法に入り、釈尊の法はその役目を果たし終えました。しかし、そのことよって仏教が減びたわけではありません。釈尊は、末法に入ってから仏法についてもきちんと説かれて生涯を閉じられているのです。では、末法に入り、釈尊の法が減じた後、どのような仏様が現れるのでしょうか。また、それは、一体、どの經典に説かれているのでしょうか。

実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。釈尊は五十年間にわたり法を説いてきましたが、最後の八年間に、自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったので、それゆえ、それ以前に説かれた法は、すべて法華経を説くための方便の教えだったのです。ですから、浄土宗・浄土真宗が依経とする観經、観無量壽經、阿弥陀經も釈尊が法華経を説くための方便のための教えであることは、いうまでもありません。さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょうか。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々がもっている尊い命を輝かせる大白法を所持され、その法を説くために、いかなる難も耐え忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華経に説かれたそのまますま身をもって行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によって証明されたのです。

真実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的な苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的な苦悩を解決せずして、真の幸福はありえないと説いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものです。

さて、「正しい」という字は一に止まる、と書きますが、正しい宗教が二つも三つもあるわけはありません。釈尊は、十方仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り、二無く亦(また)三無

し、と法華経に説かれています。

このことからわかるように、末法に生きる現代の私たちが信じるに足る正しい教えは、ただひとつしかなく、その教えを説かれた方は、末法の仏様である日蓮大聖人なのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百五十年間にわたって現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院(池袋)で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会って、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

